

学会報告

2004年度日本水産学会大会

高橋 祐一郎

日本水産学会(1)は、水産学に関する学理および応用の研究についての発表および連絡、知識の交換、情報の提供などを行う場となることにより、水産学に関する研究の進歩・普及を図り、学術の発展に寄与することを目的として、1932年に設立された学会である。わが国の水産学関連の学会の中では最も規模が大きく、大学や研究機関のみならず、多くの水産関係の民間企業や団体も加入しており、現在の会員総数は約5,000名を数え、水産系で最も充実した学会として認められている。

学会活動は極めて盛んであり、会員による研究発表、シンポジウム、会員交換会等が行われる年1回の大会の開催に加え、産業界と学会を有機的に結び付けること等を目的とした漁業、水産環境保全、水産増養殖、水産物利用の4分野についての懇話会等の開催、各地域の水産業との連携を強めることを目的とした北海道、東北、関東、中部、近畿、中国・四国、九州の七つの支部の設置とそれぞれの支部による研究発表会、講演会、見学会等の地域に根差した独自の諸活動等が行われている。また、表彰も充実しており、同学会の創始者である田内森三郎氏の功績に因んで設置された、物理的観点に立って展開され、学術上ならびに応用上貢献著しい研究業績を挙げた者に授与される田内賞をはじめ、功績賞、進歩賞、奨励賞、技術賞などを授与している。近年、水産研究では、農学諸分野はもとより、理学、工学、医学、薬学、社会科学等の広い分野を含む学際的な研究活動が活発化しつつあるが、同学会の広範な活動は、高度化、多彩化する水産に関する科学と技術の

進展に大きく寄与しているとして、国内外の産学官から高く評価されている。

同学会の平成16年度大会は、鹿児島大学を会場に、4月1日(木)～4月5日(月)の日程で開催された(2)。1日は、理事会、評議員会のほか、シンポジウム「流出油の生態系への影響と中・長期モニタリング ナホトカ号の事例を中心に」等三つのイベントが実施された。2日からは、学会のメイン行事ともいうべき、会員の口頭またはポスターによる研究発表が実施された(～4日)。今回の発表数は800を超えており、研究分野に応じて14の会場が使用された。同学会の大会は、水産に関する最新の研究情報を得るうえで最良の機会であるが、極めて発表数が多い。そのため参加者は、開会前に入手できる研究発表予定のタイトル名と報告者を事前にチェックし、開会当日に会場受付で手渡される発表要旨集を突き合わせ、綿密な傍聴スケジュールを立てながら大会に臨んでいる。内容について質問したい研究発表が同時刻に実施されてしまう場合には、傍聴することができなかった方の発表者を捜し出し、個別に議論を行うほかない。この場を兼ねて数力所設置されている休憩室は、発表会場同様、常に活気が溢れていた。また、会場の一角には、最新型の海洋観測機器の実物などが並べられた協賛企業の展示ブースがあり、終日賑わいを見せていた。

研究発表の最終日である4日には、学会賞の記念講演が行われた。極めて優れた成果に対して授与される同学会の学会賞を得たことは、水産研究者にとって一流と認められた証でもある。今回、小職と水産庁に同期入庁した研究職が発表した、赤潮原因生物に関する研究成果に対し、奨励賞が授与された。小職は、彼の栄誉を祝うとともに、自分自身も一層努力しなければと感じたものであった。

1 日本水産学会のURL(トップページ)は以下のとおり。

<http://www.soc.nii.ac.jp/jsfs/>

2 本大会のプログラム等は以下のURLに掲載。

<http://www.fish.kagoshima-u.ac.jp/JSFS.html>